

2020年8月9日

## 嵐の夜の湖上で

先週のマタイ福音書は弟子たちと群衆が荒れ野で孤立する場面でした。今週はパンを食べて満腹した群衆は解散しますが、弟子たちは湖の上で再び孤立しています。絶え間なく試練と逆境に見舞われる弟子たちの姿は、今日のわたしたちの世界と重なって見えるような気がいたします。考えてみればイエスさまの生涯は多くの危険と常に隣り合わせでした。今日の福音は改めて、イエスさまがあらゆる困難な時に「わたしたちと共にいること」に気づくよう促します。

〔人々がパンを食べて満腹した後、〕「イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、**逆風**のために波に悩まされていた。」（マタ14・22-24）

「逆風」「夕方」「水」は、古代の人々にとって人間のいのちを脅かす典型的なシンボルであったと言ってよいでしょう。激しい嵐に夜の暗闇が重なる時、人々は「恐怖」や「死」を予感したのかもしれませんが。古代の人々も現代のわたしたちも、恐れや不安を感じる出来事や要素は、あまり変わらない面があることに気づかされます。とりわけ「水」は、いのちを維持するためにはなくてはならないものですが、その反面、人間の力が及ばないもの一神の力に信頼することなくして、制御することが難しい自然の恵みそのもの一という考えも読み取ることができるようになります。

「夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。」  
（マタ14・25）

「夜明け」に「湖上を歩く」イエスさまの姿は穏やかですが、すでに十字架上の死を超えて復活に向かう威厳に満ちています。人間のいのちを守り、揺るぎない平和をもたらす、まことの神の子の姿を弟子たちに現していると言ってよいでしょう。湖上で逆風に苦戦する中、やっと訪れた救いの時ですが、弟子たちはイエスさまに気づかず「恐怖のあまり叫び声をあげ」（マタ14・26）ています。どこか奇想天外なお話の展開ですが、弟子たちが嵐の夜の湖上でいかに大きな恐怖に囚<とら>われていたのか伝わってきます。恐怖のあまりあらゆる出来事に過敏にな

ってしまった弟子たちに対して、イエスさまは手を差し伸べて「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」（マタ14・27）と呼びかけておられます。「本当に、あなたは神の子です」（マタ14・33）。ペトロと弟子たちは、まことの信仰告白へと導かれました。

災禍が続く中ですが、すぐそばにおられる主の声に耳をすませて、歩きたいと願います。主の声は大きな声ではなく「静かにささやく声」（列王記上19・12）なので、深呼吸して、心静かに祈るとき、いつも「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と繰り返し呼びかけ、わたしたちの歩みを支えてくださいます。深い悲しみと痛みを抱えた人に、主の慰めと立ち上がる勇気を与えられますように。

「神の語られることばを聞こう。  
神は平和を約束される、  
その民、神に従う民に、  
心を神に向ける人に。」  
（詩編85）

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第19主日聖書朗読箇所：

- ① 列王記上19・9 a、11-13 a  
—答唱詩編—詩編85より
- ② ロマ書9・1-5
- ③ マタイ14・22-33